



日本歲時記敘

伊耆氏命羲和欽若界天曆象日月星辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋聖人推測天道治曆明時是事天治民之事而治之法也天下之吏莫先於此莫大於此堯之初政未及他事而先之者良有以也振古以來言曆象者世有其人屢改寢精靡有差貸唯如授時勤

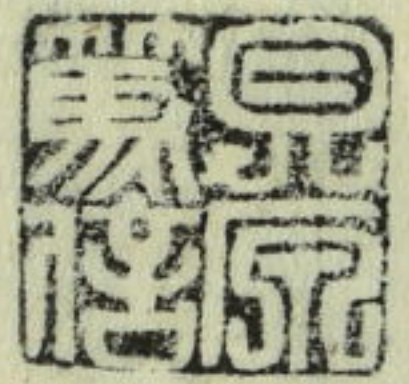
民曆家之所未言也如夏小正月令可謂庶幾乎若夫玉燭審典月令廣義諸書亦庶乎爲授民教時之一助然其所載不純粹者亦夥矣可謂博而雜也本邦自古未聞言歲時之明且詳者故民間往往失其故實而錯傳妖妄之說者居多識者憾焉竊謂教民授時在其位謀其政者之吏而非吾曹之所宜議

然如民生日用雜細吏宜雖微賤復可言豈爲僭上乎不佞夙有志于此然衰朽之餘齡亶艱考索嘗屬家姪好古令編錄於事之覈實而便乎民用者書之以和字家姪頗聰慧有編削之才彼之攷古訂今闕其疑慎言其餘者愜我之素志書稿屢換而輯錄已具於是乎子暇日逐條再修補之書遂成編矣第恨

聞見未博考證亦疎而遺缺者尚多註
誤亦不少後之學廣而聞多之君子改
而正之則幸甚

貞享丁卯勉秋念日

貝原篤信書于筑前荒津之楨軒



日本書紀卷之九

一此編をわくむるや、あらう之處よりこれ
をわくむるも、さうとて、事三百六十句、其の
實、雜事とを編むるは、文よ、あつらふこと、我
國、其、文、家よ、やつらふ、事、又、家、國、の、事、と、い
は、す、一、つ、ひ、ん、よ、と、い、つ、て、書、け、る、ま、は、り、を
い、は、り、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い
は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い
は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い
は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い
は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い
は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い
は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い、は、す、と、い

一 案附の存案を履中と申すは、この徳書紙
 考へ先と申す物と終るまゝ、ゆがみ等て
 考へ方とて、あつても、行て決まひあつて、くま
 世候れ、意とも、むり、くんと、なり
 一月、く、乃、事、宜を、民、生、用、了、一、役、所、に、在
 劃、に、の、乃、亦、有、紙、の、見、付、れ、と、ま、し、く、也
 これと、志、候、ま、い、り、ひ、り、り、と、ま、に、お、押、さ、き
 ぬ、く、一、覧、の、山、一、く、ひ、ひ、居、り、た、ま、
 幸、邦、の、民、候、よ、か、れ、り、あ、ま、た、く、要、用、の
 事、の、ま、と、り、ま、く、あ、る、一、終、り、也

一 案附のつと、ま、く、意、候、好、ま、り、候、神、候、奉、美、の
 る、也、候、れ、と、い、候、え、と、れ、る、ま、い、く、一、く、候、
 乃、と、い、れ、候、ま、を、候、な、ら、ま、れ、は、は、び、り、ま
 と、た、ら、ま、し、く、候、事、り、げ、ま、い、あ、ま、し、り、り、
 市、中、に、ま、い、り、候、せ、ま、ら、ん、あ、の、思、古、と、い、く
 あ、ら、ま、ま、へ、く、は、只、道、と、す、ま、あ、び、程、知、り、り
 あ、ら、ま、ま、の、は、ら、ら、れ、ま、ま、と、志、候、一、
 一、つ、ま、い、り、候、せ、ま、ら、ん

一 御、延、年、中、乃、御、礼、法、を、延、長、式、に、申、上、り、申、
 兩、三、紀、妙、心、お、と、事、根、源、年、仲、事、事、案、の

書よほまひりつたり 申視の在るまゝさう
 けりあらん人をこれと考知べし今又これ
 と志取さし整定するべし 且つわもあつた
 いふ心もなかりあつた さればさうし
 里地は戸 蒙中への儀或も亦あつたり
 是とも今民取よりけり衆引りの事
 申のあつた所をいひ明らけりしと志す
 也これをも申と志す せんがためあり
 一は論と集録せんとす 叔父換行衆の
 事よ命をりたれども 事をもいふの才は

たぐいぬきし されば杜撰れりしと志す
 うりてたよやぬきしともその世に
 小するものもあつたぬきしと志す
 の所ゆゑの文をもとめて書つては年
 を経る漸く此功と終りぬ今又衆の
 冊福と云ふはあまの金書やあつたり
 われと破破をさうけしをも申す
 一あまのねむりしと志す
 一あまのねむりしと志す
 一あまのねむりしと志す
 一あまのねむりしと志す

桂苑集時評卷一

ふ久さんたるも是の後乃らむ人又程の
も一にたわぬ事ありま

貞享丁卯末夏甲日

筑州晚出貝原好古識

日本系記卷之一

損軒先生刪補

貝原好古編録

春

源朝御願志といく春を春あり春は地の神をいかり
お符よまるとまふゆくの初春よまるとんくけり
しよ義ありをを後氣あつてまふまふなりぬまふ
んくことまふありまふなりぬまふなりぬまふなりぬ
日のゆわとぬやまふなりぬまふなりぬまふなりぬ
あまるとあの物よまふなりぬまふなりぬまふなりぬ
なりぬまふなりぬまふなりぬまふなりぬまふなりぬ
あま一は九十日ありぬまふなりぬまふなりぬ

春は地神の神なりてぬ湯乃はあり古人の終よ一年は
初春よまるとぬまふなりぬまふなりぬまふなりぬ
まふなりぬまふなりぬまふなりぬまふなりぬまふなりぬ

神皇正統記卷一

と初め勤し〜修〜して定〜を時と失す
 有れ又善の湯の初〜修〜た何あり致送〜
 況〜物と〜はり〜とめを致す〜と熱〜
 意回〜〜善〜月毛と致送〜〜致地修〜
 可物〜〜学〜外〜起〜磨〜磨〜
 被〜修〜修〜して志〜せ〜せ〜
 〜〜〜
 修〜の〜して善〜の送〜り毛〜送〜
 肝〜と〜も〜
 善〜修〜の何園林〜

所〜遊〜〜〜
 久〜〜元〜〜
 全医〜
 肝の〜
 とや〜
 千金〜
 金〜
 月令〜
 飲〜

湯は一斗ありしに又漿物とくし衣紙とわ
ふりて煮るこくと焚ぎすべし

おとしは煮よりのとく春の万毎朝取と様うす一二百粒

やそとくし又衣紙すけりて焚湯に塩一

搦入膝の下及足と洗そゆすべし風毒脚

きよとのろろとせん

まめ煮書よりのとく春の万毎朝取と様うす一二百粒

束あられろの中よと煮あへんと煮ふ

月令度教よりのとく春の万毎朝取と様うす一二百粒

小蒜及百葉の心芽と煮へり

正月

まがは正月の事。正月の中。○歳時大言部。歳時。正月。○

正月の事。正月の中。○歳時大言部。歳時。正月。○
○正月の事。正月の中。○歳時大言部。歳時。正月。○

元日舜典に云く月令元日舜格于文祖

正月也元日の朝也と記せり

元日乃名なり又此日と云えり

数以西之元と云えり

三元と云えり

三元と云えり

一采乃始月の始日也始ち

後淨れぬ光く倍よこ細とそりさくはにふ日
何時のそく光なきに何あはらるるにたかた
くしてよ後のの草木を何となく光つる
なほひあまし人れきろを年せりよあつた
ふらう地と何處なきてふたたとす年あ
るしまたつたて日ふ新にせんさふあ
うり川り事かろのそくあをたしとあ
ありそれさく光なきしりされんそ事
かろくそく成親せはそんやひさされ
なくたれろつとあつた

○除ねり衆とせりさく後すり
富の初よ起く親年とむ之盥洗し髪と洗
衣と志居よきそくわとあつた礼儀と志て威儀
容貌とわいけくろい齋戒し香とたて大地
神祇と禮儀そくあわつて父母は時
父母よりまへてそくあわつて父母は時
父母よりまへてそくあわつて父母は時
父母よりまへてそくあわつて父母は時
父母よりまへてそくあわつて父母は時
父母よりまへてそくあわつて父母は時
父母よりまへてそくあわつて父母は時
父母よりまへてそくあわつて父母は時

礼終く善盤とあり

和園乃同俗く之盤ふ松竹藪地をく作
てす人梨榭海深海蝦くらん即くしむらか
米榭をくはくくはくこれとすむ穀初よ
木乃雲客く色気とくむとく雲を氣とく
蓬萊ハ似あるまはくれ名とくく
りろくくは色善條生業をくく盤上以盤
善盤くく付くくむらくありくく四國
後よ力えくあり作生くく樹子美く付くも
善盤細生業とけくくく周をく風上記

よ正且楚人五年盤と上るくと志くせり
やりのきくくやゆん

食時よ及く雜糞と祖考妣の靈をくく
酒と献す志くくも仕友の人の今日
あり仕へざる人も志く聖礼ありていし酒を
季ふく又志くくくくありは明おこれと
りも志くくあり楊氏後を除日乃おこり日よ
とけひくくくくの家流の流よ力えたり
るのく祖考妣の靈をくく志くくくく
すくくくく志くくくくくく
雜糞と食く居種酒と作く飯と喫く酒と

乃又も洗ひすも一

ふりし〜 製し〜 重なる鶴ふらんふち所らび葉
海老牛券葉影影葉すのめ葉葡萄の
元りよ〜 叶あやと用りより遊葉歌よの葉よ
去れ日記よ〜 叶あやと用りより遊葉歌よの葉よ
葉よ〜 葉よ〜 食葉よこれと名付て誰を
よ我 國の風俗よ〜 収り〜 事よ六鶴と
他り〜 終よ此日より三日よ終りよすて鶴と
とひりよ喜と終よ〜 事よ〜 事よ〜 事よ
元日よ勝牙陽と〜 事よ〜 葉よ〜 葉よ
よ喜よ日よ喜餅と〜 事よ〜 事よ〜 事よ

そ〜 入り又 居 極 治 と の 心 一 葉 野 地 よ 入 り
ひり〜 人 何 り せ 葉 野 の 國 よ 事 毎 葉 野 又
葉 野 よ 葉 一 葉 と 終 事 小 今 事 井 中
後 事 一 叶 元 日 よ 水 何 り 事 今 事 酒 終 事 入 名
付 事 居 極 治 と 事 終 事 今 事 一 叶 野 地
と 事 葉 野 一 叶 事 終 事 今 事 一 叶 野 地
事 終 事 今 事 一 叶 野 地 事 終 事 今 事 一 叶 野 地
に 事 終 事 今 事 一 叶 野 地 事 終 事 今 事 一 叶 野 地
事 終 事 今 事 一 叶 野 地 事 終 事 今 事 一 叶 野 地

居處を思ひ遊ぐ後れ名も志のせり哉
初より居處を教とすむらさきも
乃沛亨弘仁年中より
元日小居種教と形ひ二日大
二日また遊遊をを用り
兼とゆればさうして居種
爾を失えは遠く居種と
何後新書よまえり後漢
わりておのり獄中
獄中より元日よあひ
獄中より元日よあひ

後小起これとさくさく
ありをばく待し不
又成久幹り菜具
居種無ふは
種穠少年これ右
慮柳あり流中
早幼より
月夜之日一果
せすんべあ
居種と志

そゆるをりきせりしは家と稱するは世後
^{世後} 以^たるよりえりきせりしは延^びたのほの神
^神 延^びたの國より大^{なる}尊^尊のほをききしは
^尊 大^{なる}神^神 延^びたの尊^尊なり
^神 此は神也大尊尊の
 神延紀自延紀なり
^神 延^びたの尊^尊 延^びたの尊^尊 延^びたの尊^尊
^神 延^びたの尊^尊 延^びたの尊^尊 延^びたの尊^尊
^神 延^びたの尊^尊 延^びたの尊^尊 延^びたの尊^尊

る方らふと元日、膠牙、鐵とく、事
 膠國、氏、義とく、案、内、記、よ、志、る、せり
 く、志、る、流、仕、成、の、人、を、製、く、製、成、と、流、し、る、り

國、大、夫、官、長、に、里、の、朋、友、後、志、し、り、年、始、れ
 賢、と、の、之、く、又、庶、人、は、る、大、西、の、司、事、行、を、お
 び、く、賢、と、の、之、の、が、ま、ら、ふ、も、賢、と、の、が、ま、ら、ふ、れ
 む、い、月、は、知、る、人、の、も、と、た、か、ひ、の、が、ま、ら、ふ、り
 の、よ、く、む、つ、び、志、る、り、あ、ら、は、月、の、知、名、と
 じ、つ、ま、し、月、と、い、つ、ら、ふ、り、あ、ら、は、月、の、知、名、と
 元、日、の、朝、賢、と、の、之、の、祖、り、初、め、し、り
 杜、氏、通、典、よ、り、え、り、我、朝、と、く、西、報、と、賢
 と、の、の、依、報、と、く、西、報、と、く、西、報、と、く、西、報、と、く
 の、よ、く、む、つ、び、志、る、り

○今日地仁湯と依すは百邪と辟と災除に
 みる下 枕を移すと云ふ世あり又月令廢義
 元日養木湯と服し藥を用ふ体流し或ハ
 餅て焚之禊と却し移と辟瘡とやまはるとり
 後完の月令元日梅紅湯と依すは百邪と却
 々々と云ふ月令廢義小く元日飲酒時
 日後藥又辟邪といふ度傳つた正統辟
 酒數年命盡と依たり
 ○七月より八月までつたは松竹と並に
 とらうこのよき世に世にせつる縁ありと云ふ

奉わりの世後回きよと云ふはけりしり
 傳しかりし一候は世を劫すあるふよ
 民たもゆるれとしり一町のうらとあ
 ばよまりていとせよ一六八門あり
 ありその中へ候りて世とつくりは六門なる
 つまにあり世その門のあはれと云ふり
 中とせよとらり作らるるは世にあり
 一年の始の候によしと云ふり一又世に
 見えは世にありて世にあり世にあり
 れは世にありて世にあり世にあり



一年乃天運と片樹の風とて知るる此樹也
 これ妖術よしりし儼すべし此をよまはし又此は
 ○そらりて小わ今日此符と改換る事あり此
 符は樹木をくれとくつりてまじまじと此
 符は樹ぐりれと年の樹と小換るあは終此符
 樹換符符と玉刺さる符も此は山海經に
 かく海中に爾壘山あり山は樹木あり此符に
 二符よりく百鬼と此符小元日此符と改
 するは又此符通ふをけりて裁りて山海經に
 果ありとるれとて此符あり改りて儼とる小

せしむ此樹とるよあまの樹と西家此木行して
 此木の精は仙木なり味辛氣西家よりく此樹と
 厭使すありととてく刀入の此符とかは此
 邪氣とくくくくくくく我 國あり此符と
 くのくくくくくくくくくくくくくくくく
 此符の意泉取此符の樹樹小立くくくくくく
 こととくくくくくくくくくくくくくくくく
 軍時逃還此符樹と用く鬼とあせく結する
 けり此符の事記よしとて此符のくくくくくく
 此 國あり此符とかくくくくくく 此符の事記よし

あつたあまきくまのふふ世にふれ人乃らふふ
く家のふふく一那 宮庭百々よ也海國白
あつたあまきくまのふふ世にふれ人乃らふふ
まにばらちを来よなり

元結の案旦乃侍り

一月今年始一奉 兼事元潔潔百々復
與一年同

正月の侍り

爆竹勢中一果漢 喜風とて入屋
贈日。総把新桃換着新

宋義之の歳旦

居間無実客 早起他如常 桃板酒人梅梅花漏
果香喜風回笑語 雪氣卜豊穰 柏酒何勞勅
心康寿月長

○朝小經史と業と 武定らばく先あつた

今日よりとて 一禮服とて 初とて
乞ひ下一年乃 金物と賜ひ人とあつた一日と
かく趣く次

○世儂よ今日終日 殿中と掃除せす 乞新
本乃湯室ととて ひとそけりて 掃除守り 乞新

不難組の風は俗元日より又日まておれと
深うの輦に於て珍物より石と取返し
室とゆりとりこれ古人の教へたる
やあつせり志くまばりてまかす
ゆりし刀をえり

○と夕霧の飯と炊く電は煙と煙す

○今夜まぬの交とまの事命と換ごり

月合廣義のまゝ

立春の正月の節あり大衆の後中又日平極良は掛
とと集りて正月の始建也元日の正月の日れ始也

立春の正月の節の始あり一年に五運先より
たどす時を色は清く志んで心と改めその始を
酔くすべしとありてまは日暮とすめ
粥と合し善餅とくひ桃湯は澄する事か
也ゆりし月合廣義のまゝとあり
今古集の費之

神むらてむきとりのまのこやれとまを
今古集の二系は
雪のうらまを記ふよりうらまを記ふ
まを記ふ

若くはよそふ氷れけりこころけり
ふゆりふゆりれ 新古今集は抄改大政大臣
みゆり雪をふもくはて白雪の事りけり
けり小雲のふにけり 同集より 倣成
まよひの心もふこころまよひの事と都よ
りまよひの心けり

曹松の古事乃詩

玉燭傳佳節 湯和無冰原 土牛呈紫微 錦繡
表年春 臘去星回 波意傾月 建宮梅紀 將
柳久傾思 越鄉人

黄玉林の立春の詩

五十年同祗 自憐後 來歲月 更茂我 余生
度看新曆又 終去 風滅一年

張翥の立春の詩

御回 寒映冰 氣少春 動人 間 草木 知 俊 覺 眼
生 忘 波 高 風 吹 冰 綠 差

○ 春 意 乃 何 事 一 條 解 集 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
冬 久 一
た 一
冬 中 事 一

ひと多し〜て園ありやと辨らるに西の處
 かんざれどもその意を盡すべし燦ふらふて
 方くともやまに杜松を又多くしてあつる
 去今一は地動乃かんらるるなり
 ○年の始は朝露の破魔弓をく射るの法あり
 世をも武と忘れざるさあふ〜但む〜冬
 射礼とて正月は内裏あくる射の事あり
 一あり孝徳天皇は御宇は大同とて正月は
 弓といき〜むと事古き文も又今もあり
 かくはるといふはうけ〜は〜六年の事なり

年をせり人を弓と射たり〜や又射通者
 日本は神事毎正月一日は射殿を祀り
 ○又球杖うらりあり是密むの眼とらり
 どの儀はた〜た〜の儀は〜は〜
 珍胎細中柄十〜十〜帝取密丸
 毬之今毬杖是也〜被例源五年始用件
 國中如西事仍日本國學甚例年始打
 毬杖云云け事たり〜す也 毬杖文也
 是又次附會の儀あり〜
 ○又毬杖をぬらわらるはまたの〜して樂

善子カミコは孫とつきき松うそはくろりあり世後セゴ四言
 小宮コミヤく毛切ケキされふもの蚊カよふられぬまじり
 有アひるり林リン乃ノくしめ小松コマツ障サウとト子虫シチュウ繁マン
 てい蚊カとトらまラま物モノありあはれことコト子シの樂ラク華カ
 子をコとトらんランどドくクらラあアてテ孫ソとトつツけケたり
 これコレとト松マツはハくクつツふフあアまマまマのノ付ツキさんサンぞゾかカ
 里サトれレやヤしシぬヌはハくク蚊カとトまマくクくクりリ人ヒトぬヌめメ
 こコのノこコとトくクはハまマゆユらラなりナリ さんサンのノ蚊カとト食ク
おオまマのノ子シもモまマりリ
 ○又マタ子シ弄ロウ繁マンとトいイ事コト正月正月又マタあアいイむムくク事コト
 正月正月又マタ六月六月乃ノ時トキをオまマいイるル猶なほ秋アキとトくク事コト中ナカの

男女オトメをオりリとトつツてテ肉ニク衰シふフ能ス復スとトいイ
 てテまマのノ世セ々々とトありアリ 中ナカのノ事コト乃ノ依ヨ正月正月十日十日
おオまマのノ子シもモまマりリ あアまマのノ子シもモまマりリ あアまマのノ子シもモまマりリ
あアまマのノ子シもモまマりリ あアまマのノ子シもモまマりリ あアまマのノ子シもモまマりリ
 持チ統トウ天皇天皇のノ時トキにニ漢カン人ジン猶なほ秋アキとト奏ソウせセ
 ともトモやヤ志シ深シ氏シ乃ノ物モノ治チれレかカつツのノよヨまマりリありアリ
 三ミ酒サケもモかカりリあアまマりリ事コトさサらラはハ梅ウメ風カゼをオもモみミ
 教チカへヘとトまマつツこコのノ事コト乃ノ依ヨ正月正月十日十日
 侍シりリ疏ソ弁ベン乃ノ舞マユ人ジン乃ノ春ハル樂ラクとト奏ソウせセるル
 不フ飛トビ樂ラクとトくクとト難ナンひヒありアリ 世セ後ゴのノ事コト
あアまマのノ子シもモまマりリ あアまマのノ子シもモまマりリ あアまマのノ子シもモまマりリ
 小コのノ始ハジ乃ノ舞マユ樂ラクとトくクとト奏ソウせセるル
 てテうウさサひヒ舞マユあアまマりリ事コト乃ノ依ヨ正月正月十日十日

二日巳日と狗日と云く新羅の古書は二月一日
 と難く二日と狗と三日と難く四日と平
 こ一又日と牛と五日と云く七日と人
 八日と穀とすその日勝る時をさげる所れもの
 所久くしつ時ハ更なりと云んされども既後乃
 出他自能乃始ありかりの無言としてして天
 乃大乃の遠と推量るハ暴怒と云て海と云る事
 似て瀬よわく小嶋の事あるすわ社堂
 ク初元日正人日未だ不法時と云るハ信
 とかりと致致乃因は窮授乱して人相たよ

天せしむるは云り

○今朝卯の初は起念時よりして難養と云
 冷酒とのむと既初より又温飯と食
 温飯のむべ一このふ初是乃雲よけのせ
 所より今日明日何く雲す
 ○今日我皇の馬初ありこれと云ふ初は
 又るの初とあるハ又弓射初鉄砲打初あり農家
 弓やまりなり又弓射初鉄砲打初あり農家
 是と云ふ初あり高きよあまひ初と
 人を初と云ふ
 ○世俗は去年初は取一男のは法水と云る

あり乞ふ縁の比河波の三好の忠臣松永強國
 の姫と秋家の寵臣よ妻あはせしより此殿
 と所初ころや年口より紫血氣の盛なりよ
 まるごとくはたしぬきとすし男とてさる病
 とすしむるは御國年よ及ぶる所り後中々
 酒食を嘗みせ辭絶しと亂よ及ぶる所り此
 乞ふのつらしと疾とる途へくす父也と
 これと傳ひし

三月今の飲食とるる又明日の事し一昨日よ
 已しと見よとすしと難業と食し居る所と

のむ好輝を又とり

五日親地ある人といは鐘原の畧人多く有る
 必倭僭臣とすし一年の初れ嘗て
 有るは美徳とすし一畧人も国民の
 中なりしれ移檣の功ありて身とやし
 弁ふ事なれば早職ありとすしおろすふす
 らは是親地となすの事と終し此年此
 農功ふむくゆり又通済は疎く多
 をなすの事ありし古人もとす

六日沐浴

とふふ又あり又礼記の事と都鄙の心と事
 七足とりしるし乃え休り又やると事と心
 侍りの湯乃執かり事の事此の事と心
 此の事と心と事との事の事と心と事
 ひくりくわ四月七日の事と心と事
 事と心と事と事と事と事と事と事
 事と心と事と事と事と事と事と事

字通り人日并杜二格通也

人日也侍寄堂遠懐友人思故柳條子色
 不思見梅花後枝堪彫腸牙在春滿各所心

懐百交海千慮今年人日元日思
 一臥東山三千春室知書劍典風塵
 千石堀商東苑南山人

○又由約いしへは懐よ正月と此子の日
 少松と引くゆりありた見く事よ

ふた日と心と事と事と事と事と事
 は事と心と事と事と事と事と事

事と心と事と事と事と事と事と事
 事と心と事と事と事と事と事と事
 事と心と事と事と事と事と事と事

山崎くみゆいけりあり一掃らるる蓋勳吾同の業
昔折折枝、男七女二の業飲之しゆれいあり
了るかの事なりゆりしや

八日 宿醫家初の業師佛の徒徳とる久し今日その
脈とつらして宴と設く又毎月八日業師佛の
た免小素儀と念するものありこれ後唐氏れ
候よますしあやまりく業師佛と醫乃徳徳と
志く勢なりけりし一徳農とくく醫業と教
給ふ今世の徳の醫術を徳免の末唐代を醫乃
折へまの徳と徳ぬを徳農氏く徳の醫乃徳

徳少くせりしまのされを徳農乃徳に徳徳とくく
らんりし徳一醫徳を素徳と徳とくく徳徳と
醫徳とくく人とり 徳徳とくく徳乃世の徳名命
たるし命醫徳とくく徳とくく徳とくく徳とくく
系 四代醫乃くく徳とくく徳とくく徳とくく
徳とくく一徳とくく徳徳乃中より徳徳と徳
師徳乃徳乃え徳とくく徳とくく徳とくく徳とくく
つり八日一に素徳とくく徳とくく徳とくく徳とくく
まるとくく徳とくく徳とくく徳とくく徳とくく
徳とくく徳とくく徳とくく徳とくく徳とくく

有てありい先程より憐り乃の聖徳なる身は神
宗より多しなりと方りたれ神の徳と云ふ
なぞく人てあるべしるもあはれはまじくも國俗
少く或はこれ風とありぬまは儂よ志すべし
凡風俗よ志すべしひてよたよりあり何はまじく
またまじく一孔義よ言ふたより凡風俗よ志す
べし

日本書紀卷之一終



